

という人物が描き、死ぬまで手放さなかった作品で、その繊細な人物描写はまさしく多くの鑑賞者に驚きや感動を与える、など。では『apple』の方はどうでしょうか。これを見て、鑑賞者はどう感じるでしょうか。作品がブロンズか何かで作られていれば、多くの人には「アート」であると思えるのかもしれませんが、しかしそこには正真正銘、鮮やかな薄緑色の皮に包まれた、少し小柄なリンゴが置いてあります。これが本当に「アート」なのでしょう。

2002年、私がまだカナダの大学で芸術学を学んでいた頃、当時住んでいたトロント市でこの作品を見ました。展示会場に入っただけ、左側の角に、この『apple』が置かれていたのを今でも鮮明に覚えています。最初にも書きましたが、ガラスの机の上に果物のリンゴが一つ、ぽつんと置かれていたのです。しかし、この作品はそれだけではありませんでした。この作品の横に「食べても良いですよ」と表示があったのです。正確に言えば、「リンゴが腐っていくのを見るのも鑑賞者の自由。リンゴを食べてしまうのも鑑賞者の自由。どちらを選ぶかは鑑賞者と作品との関係次第です。鑑賞者が作品を作るのです。」といった旨の説明文がついていた気がします。それにしても作品を食べるって一体何なのだろう、本当に食べていいのだろうか、そう思ったことは今でもはっきりと覚えています。そもそもリンゴとはどんな意味をもつ果物なのか、また作品を食べることは本当に許されているのか、「食べてください」という表示は本物か偽物か、どこまでが作品でどこまでが周囲の環境なのか・・・そんなことを、しばらくの間、リンゴを前に考えていました。この作品はコンセプチュアル（概念的）アートの一例です。

「アート」の中には、簡単には答えの出ない作品や、また逆に答えの出過ぎる作品など様々です。それらに多く触れることが、生徒たちにとって世界中の多様な考えに少しでも心を開く練習となれば、と思います。それは芸術分野のみならず社会、歴史、文学、文化、宗教、政治、テクノロジーなど全てにおいてです。自分がただ単に知らない、分からない、または経験したことがないからと言って自分の扉を閉じてしまうことだけはして欲しくありません。生徒が自分達の扉を世界に向かい広く開けることで、IBDPアートの基本理念である「The study of visual arts and the journey within it encourages respect for cultural and aesthetic differences and promotes creative thinking and problem solving. (芸術を学ぶという経験を通し、互いの文化や美的考えの違いを認め、創造性を養うだけでなく、問題解決能力も育てる)」(IBO; Diploma Programme Visual Arts Guide p.3) という目的が達成されるものと考えます。

黒川 礼子 (くろかわ あやこ)

立命館宇治高等学校 IBDP アート(美術)担当
日本の高校を卒業後、単身でカナダに渡る。ヨーク大学芸術学優秀学士取得後、カナダ政府および大学院より全額奨学金を取得し、ウェスタンオンタリオ大学院にて芸術学修士号取得。カナダ国内で個展、グループ展などに参加。カナダに10年滞在した後、日本に帰国。



仁賀奈 真耶 立命館宇治高等学校 2年生 IBDP 1年目

私は9歳から約5年半、アメリカのオハイオ州で過ごしました。現地でアジア人の生徒は私一人でしたが、小学6年生の頃には生徒会長をするなど、充実した学校生活を送っていました。

中学1年生になり、今度はイタリアのパドヴァという町に引越し、現地のインターナショナルスクールで学びました。そこにはアメリカとは異なり、様々な国籍を持った生徒たちが多く通っていました。海外で生活する上で常に私が心がけたのは、勉強だけでなくバレーボール、バスケットボール、ダンスなど様々なスポーツに挑戦し、バランスのとれた生活を送ることでした。

日本へ帰国後、現在は立命館宇治高等学校のIBDPで学んでいます。教科群グループ6ではアートを履修しているのですが、私は自分自身の創造性を伸ばし、いかに「私のアート」を制作するか、ということに専念しています。

私自身、もともとグラフィックデザインやコラージュ、静物画など様々なアートの分野に興味を持っていました。

しかしこれまでのアートの授業では、何をどうするかということが予め決められていました。また、以前、コンピューターを使い写真作品を制作し、それを当時の先生に見せたところ「こんなのはアートではない」と言われ、ショックを受けたことがあります。

しかし、IBDPのアートは異なります。アートという分野を、そして「私のアート」を深く探求することができるIBDPのアートは、私にとって楽しみとなっています。アートの授業では黒川先生のサポートもありますし、IBDP全体の勉強方法や効率的な時間の使い方などは、アカデミック支援担当のトーマス先生に相談しています。これら学校における生徒支援のおかげで、日々バランスのとれた生活を送ることができています。

将来の夢はまだ決まっていませんが、人前でしゃべったり表現したりすることが好きなので、アクティング(演劇)に挑戦したいと思っています。また言語を学ぶことも好きで、現在は3カ国語を使うことができますのですが、その言語能力を活用できる方面にも興味があります。これまで同様、これからもバランスをとりつつ、様々なことに挑戦していきたいと思っています。



黒川先生のIBDPアートの紹介と立命館宇治での実践の報告と、そのクラスを受講している仁賀奈さんのエッセイです。

日本やアメリカの高校での美術・アートの授業とは、目的・方法が大いに異なります。IBDPの学力観が明確に現れています。

IB教育の学力観や指導・学習方法が、帰国生の学力伸長と日本の学校教育の改革のために、広がって欲しいと切に望みます。そのパイオニアである立命館宇治でのIB教育に大きく期待します。頑張ってください！